

1. 研究主題

実践的運用能力の育成 ～4技能を統合した指導の工夫～

アドバイザー 立命館大学 教育開発推進機構 山岡 憲史 教授

2. 主題設定の理由

○4技能を統合した言語活動のねらい

現行の指導要領では「4技能を統合的に活用できるコミュニケーション能力を育成する」ことを基本方針の柱の1つにしている。日常生活で行われるコミュニケーションでは母語、外国語を問わず単一の技能だけで完結することは少なく、複数の技能が関連することが普通であることから技能統合は当然のことと言える。しかし、ともすると英語を使えることは1つのスキルのように見なされ、そのスキルの習得だけが英語学習の中で1番大切な要素のようにとらえられていることがある。結果授業では暗記することが優先され、言語を使用するというより、言語操作のようなドリルに終始しかねない。しかしそれでは試験対策の英語学習になり生徒は英語を学ぶ喜びを感じることはできないであろう。やはり英語を用いて理解し表現できることが大切であり、それができたときに達成感を感じさらに学ぶ意欲を持つであろう。であれば授業の中により実際的な英語運用の場面を設定し4技能を統合した活動を取り入れることが必要となるであろう。具体的には読んだことを話したり、書いたことを伝えたりすることでそれぞれの活動につながりが生まれ、「相手に話して伝えるために聞く」など活動に目的が生まれる。そのような活動を学習に仕組むことで英語の知識の豊富さだけでなく相手を知ろう、理解しようという発想が生まれてくる。これこそが英語を学ぶ本来の目的であると考えます。

また、技能統合をさせた発展的な言語活動に加え、それを下支えする基礎基本の定着も欠かすことができない。誰にでも理解できるユニバーサルデザイン授業の視点から見ても、情報の視覚化は多くの学習者に理解を促すことが認められている。パワーポイントの特徴である「動く、消える、並び替える」などは英文法を理解する上できわめて効果的であると考えます。また、生徒にとって身近で関心のあるたくさんの方の写真や動画を自由に取り込むことができ、興味の湧きやすい授業作りができるうえ、板書をずらす時間を削れるため表現活動に時間を回すことが出来るなど、多くのメリットがあると考えます。本研究は基礎基本の定着と発展的な言語活動の両輪で進めていくことになった。

○生徒の実態

平成27年度鳥取県立入試の分析では、
「文脈に即して適切な連語表現を解答する設問や、スピーチを聞いて自分の感想などを表現する設問については正答率が低く、実際に使われる場面を想定して練習したり、理解したことに基づいて感想や意見を書いたり話したりする言語活動が必要である。」

「登場人物の発言内容の要点について、英語で解答したりする設問の正答率が低いため、会話の中で話

題の中心となっていることを読み取って理解したのち、自分の言葉で要点をまとめて他者に伝える等の言語活動が必要である。」

「物語のあらすじや内容から判断して適切な英語を補充したり、物語の展開から考えられる登場人物の動機を判断し、記述したりして解答する設問の正答率が低いため、英文に記されている重要な事柄や情報を、文脈や展開の中で関連づけてまとめ表現する言語活動を充実させる必要がある。」とある。

下線部はいずれも技能を統合した言語活動の必要性を述べている部分である。これは入試の分析であるため、コミュニケーションのツールとしての英語力を診たものではないかもしれないが、生徒の英語力を向上させる上での1つの指標であることは間違いない。このように、県の分析からも技能統合した言語活動の必要性は認められている。

○4グループに分かれて研究

鳥取県東部は本研究大会を担当する以前から鳥取市と八頭郡に分かれて研究に取り組んできた。八頭は1グループとして単独で基礎基本の定着を目指してパワーポイントを用いた視覚に訴える教材の開発に取り組んできた。鳥取市は3グループに分かれて書くことを軸とした4技能統合した指導の工夫を研究してきた。それぞれが魅力有るテーマであることからそれらの要素は残し、鳥取市は「書くこと」だけでなく「話すこと」「読むこと」を軸に加え3チームで研究に取り組むことにした。そしてこれらをまとめたものがこの3年間の研究テーマとなった。

実践的運用能力の育成

～4技能を統合した指導の工夫～

Aグループ：読むことを柱として

Bグループ：話すことを柱として

Cグループ：書くことを柱として

Dグループ：学習意欲を高めるための視覚教材の工夫

A B Cは1つの技能を柱に置き、その技能と他の技能を統合した発展的な指導法の研究である。ただし、他の3技能を同時に統合するというわけではなく、1技能と他の1技能の統合でもよく、4技能全て同時に統合する活動というわけではない。またDは視覚に訴えるデジタル教材を開発し、文法毎に整理・統合するなどの研究を進めた。研究1年目は研究主題を設定するのに費やし、実質この研究テーマで東部全体が動き出したのは1年目の中頃である平成26年の8月からであった。

3. 研究仮説

現実に起きそうな場面設定のもとで、技能を統合したインタラクションのある言語活動を單元の中に設定し、言語を運用する訓練を重ねることで実践的運用能力が身につくであろう。

4. 研究方法

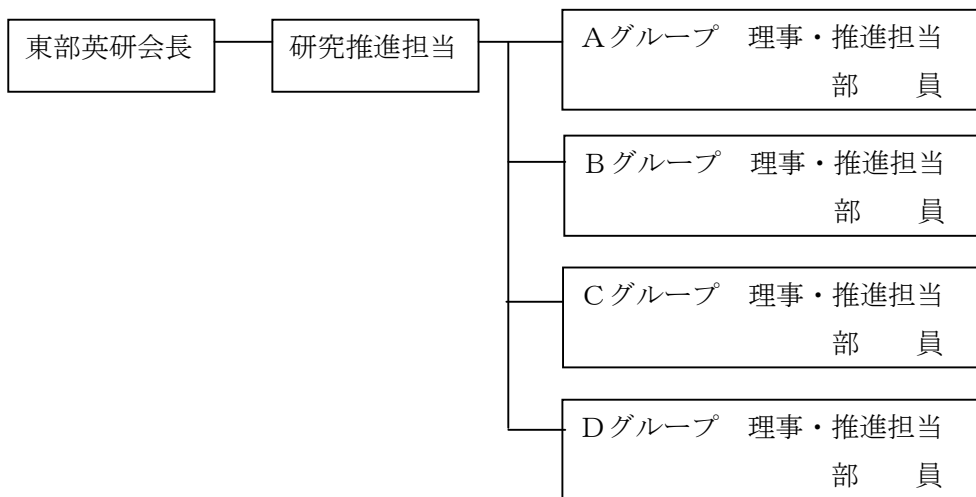
(1) 理論研究

- ・生徒の実態把握
- ・技能を統合した言語活動の理論研究

(2) 実践研究

- ・理論研究に基づき、授業実践を行い、生徒の変容を分析する。
- ・技能を統合した言語活動を積極的に取り入れた授業を継続的に実践する。
- ・グループ毎に実践と振り返りを繰り返し、総員の力によって研究を積み重ねる。

5. 研究組織



6. 研究経過

平成26年

- | | | |
|--------|---------------------------|-------------------|
| 5月22日 | 第1回東部英研第1回理事会 | (研究大会に向けてキックオフ) |
| 6月～8月 | 研究の方向性・研究テーマの検討、オブザーバーの人選 | |
| 8月4日 | 東部地区中英研第1回主任会 | (研究テーマ・担当グループ決定) |
| 9月11日 | 東部地区第3回理事会 | (これまでの取り組みを報告) |
| 11月21日 | 八頭郡(Dグループ)授業研 | |
| 12月2日 | 東部英研研究大会 | |
| 2月2日 | 東部英研都市代表者会 | (来年度の授業研のあり方について) |
| 2月17日 | 東部英研第4回理事会 | (今年度のまとめと来年に向けて) |

平成27年

- 5月26日 第1回理事会 (昨年度までの取り組みの確認)
(今年の研究推進計画について)
- 6月 8日 第2回理事会兼研究推進リーダー会
(各グループの今年度の活動計画)
- 7月 7日 第1回東部英研研究大会
- 8月17日 東部英研第1回主任会 (1学期の取り組みのまとめ)
- 9月10日 東部英研第3回理事会 (第2回授業研について)
- 10月15日 第2回東部英研研究大会
- 11月13日 鳥取市中教振研究大会 兼 第3回東部英研研究大会
- 2月16日 東部英研第4回理事会 (今年度の取り組みのまとめ、来年度の方針)

平成28年

- 5月27日 東部英研第1回理事会 (28年度の取り組みについて)
- 6月28日 東部英研第2回理事会 (大会までの研究行程、第1回授業研について)
研究推進リーダー会
- 7月14日 **東部英研第1回授業研 (アドバイザー派遣事業を活用)**
- 夏休み期間 グループ部会 指導案検討、分科会の構成を検討
- 9月15日 東部英研第3回理事会 各グループの研究の進捗状況確認
大会当日に向けて工程の確認
- 10月中旬 県大会最終案内配布
- 10月27日 **東部英研第2回授業研 (アドバイザー派遣事業を活用)**
研究推進リーダー会 当日の役割分担と準備について
- 11月下旬 各グループでのプレ授業 Aグループ 11月17日
Bグループ 11月24日
Cグループ 11月25日
Dグループ 11月22日
- 12月 1日 鳥取県中学校英語教育研究会 大会当日

7. 各グループの研究概要・成果と課題

Aグループ分科会

『実践的運用能力の育成』

～4技能を統合した指導の工夫～

Aグループ：読むことを柱として

1 テーマ設定の理由

本県の高校入試問題は、4技能のバランスを考えて出題されている。その中でも中心となるのが『長文読解問題』である。しかし中学生において、長文読解に苦手意識を持っている生徒が多いことも事実である。Aグループ（鳥取北中学校・福部未来学園中学校・鳥取西中学校・岩美中学校・中ノ郷中学校）では、この「読むこと」に重きを置き、活動に取り組んだ。「中学校学習指導要領」の「読むこと」の目標の一つとして、「英語を読むことに慣れ親しみ、初歩的な英語を読んで書き手の意向を理解できるようにする。」というものがある。ただ、漠然と長文読解問題を生徒に解かせるのではなく、意図を持ち、多角的な教材を用いて生徒の興味・関心を高めながら取り組ませたいと考えた。

また、Aグループ各校で「短期目標」（日常的な取り組み）と「長期目標」（単元ごとの取り組み）を設定した。日常的な取り組みとしては、既習事項を使ったスパイラル学習を重ね、生徒の学力向上を図った。単元ごとの取り組みとしては、各単元で課題を設定し、活動に取り組む、長文の概要が捉えられるように指導をした。近年、アクティブラーニング、グループワーク、ペアワークなど協同学習の重要性が注目されている。しかし、個で黙々と活動に取り組むこともとても大切なことである。集団と個のバランスを考えた教材研究を行い、生徒の学力向上に向けて研究を進めた。

2 テーマにせまるための共通実践事項

Aグループでは定期的に「読む活動」についての意見・情報交換の会を持ち、授業での活動の取り入れ方や目標設定の仕方など、各校の実践を持ち寄り共有した。また、研究授業も行い、単元ごとの課題設定の仕方などを学びあった。そして、他校で学んだことを自校に持ち帰り、生徒にとってよりよい授業となるよう、グループで研究を重ねてきた。

A L Tの日記やメディア媒体を活用しての読解問題など、生徒にとって身近で興味、関心をもって取り組める教材づくりを意識し、共通で実践してきた。

以下にある「3 具体的な取り組み」が主な共通実践事項である。

3 具体的な取り組み

以下に、Aグループが取り組んだ具体的な取り組みを紹介する。

I 短期目標として：日常的な取り組み

① ALT作成の日記

ALTが書いた日記を授業の導入部分に5分程度の読解問題として取り組ませた。内容理解の確認のために、Q&Aを1～2問、T o r Fを1問、ALTによるリスニング問題を1問解かせた。

ALTの日常を基にして、比較的最近習った既習事項を使ってもらい、日記を書いてもらった。ALTの日記と言うことで、生徒たちは一般的な読解問題よりも興味を持って取り組んでいた。

② 新聞やインターネットより

新聞やインターネットなどのメディア媒体より時事問題を取り上げ、長文読解問題として使った。その時、その時のタイムリーなもの（新しいハリーポッターの本出版、リオ・デ・ジャネイロオリンピック、ボブ・ディランのノーベル文学賞受賞など）を使い、生徒の社会的な視野の広がりや、意欲的に取り組む生徒の姿が多く見られた。

③ 昔話の英語版

誰もが知っている昔話（桃太郎、浦島太郎など）を用いての読解問題として使用した。生徒の間にも広く知れ渡っている物語だからこそ、「この部分は英語でこう表現するのか」という発見もあり、生徒にとっても学びの多い活動であった。また、英文を順番に正しく並べかえて物語を仕上げるなど、生徒みんなが知っているからこそできるグループ活動もでき、効果的であった。

II 長期目標：単元ごとの取り組み

① 教科書を使って1

- ・単元のまとめの“READING FOR COMMUNICATION”の概要について、個人・ペア・グループで話し合わせて内容をつかませる。

※話し合いの際にはホワイトボードなどを活用して。

- ・“READING FOR COMMUNICATION”の概要をつかんだ上で、一人ひとりわかったこと・感想を英文で1～2文書く。

- ・わかったことや感想をクラスの中で発表する。

※その際に+1文で話せたらベスト。

② 教科書を使って2

New Horizon English Course2 の“Let’s Read 1 Carpenter’s Gift”の本文を、ナレーター役と登場人物3人の計4名に分担をして音読をする。何回か練習を行い、最終的にはクラスで発表会をするということを目指し取り組んだ。第3時の発表会では、クラスの全体で音読ができない生徒はいなかった。さらに、音読を通して内容理解するだけでなく、友達の音読を何度もくり返し聞くことにより、リスニングによる理解もできたようだ。自分のセリフだけでも、少なくとも15回は音読をしているし、物語全体を通して10回以上は聞いている。教員側から、詳しく内容を説明したり、問題を出したりしなくとも、音読をくり返すことにより、生徒たちは自然と内容理解を深められたようだった。また、家庭学習で行ったワークやプリントも普段よりも確実に答えられているようだった。

Ⅲ 読ませ方の工夫（発音、音声指導など）

- ①フォニックスを導入期にしっかりと定着させる。中学1年次における丁寧なフォニックス指導。
- ②歌を聴かせ、歌詞を聴き取らせる。日本語の歌詞から英語を推測させたりする取り組みをした後、発音を意識しながら歌う。

4 まとめ（成果と今後の課題）

【成果】

- ・継続して続けていくことによって、読むコツが少しずつわかり、Q&AやTF問題の正答率が上がった。
- ・長文の概要を捉え、説明する力が身についてきた。
- ・文を読むスピードが上がった。
- ・読むことに対して抵抗感を持つ生徒が少なくなった。
- ・フォニックスや音読の指導も継続することで効果が見られた。
- ・発表活動を通して、ふだん音読練習を苦手と感じている生徒が、発音や抑揚に気をつけて音読することができた。
- ・音読やグループワークを通して読むことに対して前向きに取り組める生徒が増えた。

【課題】

- ・どのようにして生徒の読む力を評価していくのか。
- ・読む活動からどのように書く活動・話す活動へとつなげていくか、4技能をどのように統合していくか。
- ・個人差が大きいのでどこにポイントをおいて、読む教材を選択していくか。
- ・長文を読んで英語で感想を述べることは難しいため、フォーマットを提示し慣らしていくことが大切である。

B グループ分科会

『実践的運用能力の育成』

～ 4 技能を統合した指導の工夫～

B グループ：話すことを柱として（シャトルチャットの活用）

1 テーマ設定の理由

「シャトルチャット」は、鳥取県英語教育推進室が「話す力」育成のために作成し、県下の中学校に全校配布した教材である。「シャトルチャット」は、目標とする基本文を含む2～3の問答からできており、例文には、使用者の発想で自由に表現を変えられる部分が盛り込まれている。例文は、県下の中学校で使用されている教科書を参考に作られてはいるが、その全てが学校や生徒の状況、教師のねらいに合致するものではない。そこで、当初から、使用する教師の意図で使いやすいようにその内容を変更することを前提に作成されている。

今回、B グループの研究の柱が「話すこと」となったとき、この「シャトルチャット」の活用方法と効果の検証をすべきではないかという声が上がった。それは、次の2つが主な理由である。

1つは、「シャトルチャット」のモデルとなった教材を使った県外の実践や「シャトルチャット」を既に利用している県下の教員の実践からは、確かに「話す力」の育成に効果があるという報告がなされていること、もう1つは全校配布された教材であるにもかかわらず、全く使用したことがない、あるいは、使用してみたいのだが、その使い方がよくわからないという教員が少なくないことである。

もし、「シャトルチャット」が、「話す力」の育成に効果がある優れた教材ならば、このままそれを十分に活用せずに置くことは、みすみす鳥取県の中学生の「話す力」を向上させられるチャンスを逃すことになりはしないかという危惧がある。B グループの5つの中学校の生徒達を対象としたアンケートでは、4技能のうち「話す力」を付けたいと考える生徒が最も多かった。現在「話す力」の育成のための手法や教材は様々あるが、これが特に有効というものはなく、この「シャトルチャット」が、我々英語教師の「話す力」育成の壁を破る突破口になればという期待を持って研究に着手した。

研究にあたっては、次の研究仮説を立て、以下の研究方法に従って実践を積むこととした。

【研究仮説】

- (1) シャトルチャットを活用すれば、「英語で話そうとする意欲」が高まる。
- (2) シャトルチャットを活用すれば、「英語で話す力」が伸びる。

【研究方法】

(1) 活用の検証方法

シャトルチャットの活用については、各学校でシャトルチャットを使用した実践を、以下の共通の観点で記録することとした。

- ①学年
- ②(シャトルチャットの) セクション・パート
- ③文法項目
- ④使用場面(導入・展開・まとめ・その他)
- ⑤使用目的(ウォームアップ・復習・定着・文型導入・その他)
- ⑥使用時期
- ⑦使用期間
- ⑧使用形態(原版のまま・一部改訂・新規)
- ⑨具体的な活用手順
- ⑩評価方法・評価規準(基準)
- ⑪実践のまとめ(成果と課題)

(2) 「意欲」の評価方法

- ①アンケートを年2回取り、生徒の意識の変容から評価する。

(3) 「話す力」の評価方法

- ①アンケートを年2回取り、生徒の意識の変容から、評価する。
- ②スピーキングテストを実施し、その結果の変容で評価する。

その際、以下の例のようにある程度統一した評価規準で評価する。

(例) レベル1 : 紙を見て、正しい発音・アクセント・イントネーションで、つまらずに話せる(読める)

レベル2 : Read & Look Up をして、正しい発音・アクセント・イントネーションで、つまらずに話せる(読める)

レベル3 : 正しい発音・アクセント・イントネーションで、つまらずに話せる(暗唱できる)

レベル4 : アイコンタクトをしながら、正しい発音・アクセント・イントネーションで、つまらずに話せる(暗唱できる)

レベル5 : アイコンタクトをしながら、正しい発音・イントネーションで、つまらずに、ジェスチャーやアクセントを工夫し、話せる(暗唱できる)

レベル6 : アイコンタクトをしながら、正しい発音・イントネーションで、つまらずに、ジェスチャーやアクセントを工夫し、話の内容を変えたり、付け加えたりして、話せる(暗唱できる)

2 活用の実際

(1) の観点の分析

- ①学年 1 学年 : 50%、2 学年 : 30%、3 学年 : 20% …1 学年での活用が多い。

② (シャトルチャットの) セクション・パート、③文法項目

1年生は疑問詞を扱ったパート、2年生は授業で学習する項目をその都度使用する実践例が見られた。3年生は現在完了形を扱ったパートを使用していた学校があった。

④使用場面 導入：70%、展開：10%、導入とまとめ：20%

大部分の実践が、導入時の使用であった。

⑤使用目的 1つの目的だけでなく、ウォームアップ・復習・定着と複数の使用目的に使っている学校が多く、中でも60%の学校が定着で利用していた。

⑥使用時期、⑦使用期間 …時期はさまざまあったが、40%の学校が1か月間使用していた。

⑧使用形態 原版：20%、一部改訂：40%、新規：40%

生徒や学校の実態により、原版を改訂、あるいは新しく作って使用した学校が多かった。

⑨具体的な活用手順 (実践例)

1 ウォームアップ

授業の始めに、帯活動としてシャトルチャットを用いて会話練習をする。

- ・1回目はシャトルチャット通りに話す。2回目以降より選択肢を入れたり、生徒が自分で考えて話す。

[発展的な活動として]

- ・シャトルチャットの会話をクラスで披露し、その会話の内容についてQandAをする。
- ・自分や相手が話した会話をシートに書く。

2 復習としての活用

①既習事項を用いてシャトルチャットに取り組む。

これまでに習った事項を用いて会話をする。シャトルチャットのパターン通りでもよいが、慣れてきたら自由度を増やし、自分たちで考えたオリジナルのものをしてよい。

②前時の復習にシャトルチャットを用いる。

前時の重要ポイントを抑えるためにシャトルチャットを活用する。①と同様に慣れてきたら自由度を増やし、オリジナルのシャトルチャットをしてよい。

3 導入としての活用

①新出表現や文法の導入として活用する。

読む練習をした後その使い方について説明し、その表現を使って会話する。慣れてきたら表現の自由度を増やし会話練習する。

4 主活動としての活用

ターゲットセンテンスの表現や文法内容を用いたシャトルチャットをメインの活動として活用する。シャトルチャットを複数回練習した後、穴埋め個所を作ったチャットを使っていく。徐々に穴埋めの個数を増やしていき、練習してクラスで披露したり、QandAに挑戦したりする。

⑩評価方法・評価規準 (基準)

評価方法はスピーキングテストと授業中の観察に大別できる。スピーキングテストを評価に用いたのは約30%、授業中の観察を用いたのは約70%だった。両方評価に用いたという学校もあった。スピーキングテストの評価の仕方については、例は示したものの、統一した

評価規準（基準）の作成には至っていない。

3 「意欲」「話す力」の変容

1. アンケート結果

「今後つけたい英語の力について答えなさい」（前期）

「聞き取る力をつけたい」…全体の96.2%の生徒が肯定的評価。

（「そう思う」「どちらかといえばそう思う」）

「読み取る力をつけたい」…全体の97.0%の生徒が肯定的評価。

「書く力をつけたい」……全体の97.1%の生徒が肯定的評価。

「話す力をつけたい」……全体の97.4%の生徒が肯定的評価。

「今後つけたい英語の力について答えなさい」（後期）

「聞き取る力をつけたい」…全体の96.9%の生徒が肯定的評価。 (+0.7)

「読み取る力をつけたい」…全体の98.1%の生徒が肯定的評価。 (+1.1)

「書く力をつけたい」……全体の97.0%の生徒が肯定的評価。 (-0.1)

「話す力をつけたい」……全体の98.5%の生徒が肯定的評価。 (+1.1)

⇒◎「話す力」を付けたいと感じている生徒の割合が前期と比べ高くなっている。

「4月の頃と比べ、現在のあなたの英語の力はどうですか」（前期）

「聞き取る力がついている」…全体の82.8%の生徒が肯定的評価。

「読み取る力がついている」…全体の85.9%の生徒が肯定的評価。

「書く力がついている」……全体の82.4%の生徒が肯定的評価。

「話す力がついている」……全体の73.9%の生徒が肯定的評価。

⇒◎最もつけたい「話す力」が一番ついていないと感じている。

「4月の頃と比べ、現在のあなたの英語の力はどうですか」（後期）

「聞き取る力がついている」…全体の91.3%の生徒が肯定的評価。 (+8.5)

「読み取る力がついている」…全体の88.9%の生徒が肯定的評価。 (+3.0)

「書く力がついている」……全体の84.5%の生徒が肯定的評価。 (+2.1)

「話す力がついている」……全体の85.2%の生徒が肯定的評価。 (+11.3)

⇒◎「話す力」・「聞く力」がついていると感じている生徒の割合が前期と比べ高くなっている。

「シャトルチャットは役に立っているか」（後期）

「聞き取る力をつけるのに役立っている」…全体の92.4%の生徒が肯定的評価。

「読み取る力をつけるのに役立っている」…全体の92.2%の生徒が肯定的評価。

「書く力をつけるのに役立っている」……全体の82.5%の生徒が肯定的評価。

「話す力をつけるのに役立っている」……全体の94.9%の生徒が肯定的評価。

⇒◎「話す力」・「聞く力」をつけるのに役立っていると感じている生徒の割合も高いが、

「読む力」「書く力」をつけるのにも役立つと感じている生徒の割合も高い。

4. まとめ（成果と今後の課題）

〔仮説の検証について〕

- (1) シャトルチャットを活用すれば、「英語で話そうとする意欲」が高まる、については、前期「話す力をつけたい」は97.4%と高い値を示していたが、後期は98.5%と+1.1%増えており、意欲はさらに高まっていると考えられる。
- (2) シャトルチャットを活用すれば、「英語で話す力」が伸びる、についても、上記のアンケートを比較すると、「話す力」が伸びたと感じている生徒が前期アンケートより11.3%アップしている。「聞く力」も8.5%とアップしており、「話す力」「聞く力」の伸びは、「読み取る力」「書く力」の伸びより明らかに大きくなっている。これらのことから、シャトルチャットは話す力が伸びるだけでなく、聞く力にまで良い影響を与えていることが分かる。

〔成果〕

原版を元に、生徒の実態、興味関心に合わせたシャトルチャットを新規に作成することで、意欲的に取り組む生徒が多く見られた。シャトルチャットは会話のパターンが決まっているので、生徒にとっては取り組みやすい教材であるが、音読→暗唱→会話と段階を踏んで練習することで会話の骨格が定着しやすくなり、パロディングを使った会話を続ける活動や、ワンセンテンスを加えて話したり書いたりする創作活動に入りやすくなった。また、段階を踏むことで、その都度生徒の定着度を見ることができるようにもシャトルチャットの利点ともいえる。さらに、シャトルチャットを使うことで話すことを楽しむ生徒、会話を長く続けようとする生徒が増え、自信をもって話すことができる生徒が増えた。このことはアンケート結果の「話す力」の伸びからも明らかである。生徒たちの話そうとする意欲を引き出すものとしてはシャトルチャットは有効だと考える。

〔課題〕

シャトルチャットを使用する際の一番の課題は評価である。評価の仕方を学年や学校で統一しておく必要がある。スピーキングテストを実施した学校では意欲的にシャトルチャットに取り組む生徒が増えたという意見もあり、「話す力」であればスピーキングテスト、「書く力」であればライティングで評価する、ということをあらかじめ生徒に知らせることで意欲向上につながると考えられる。また、生徒を評価する場合、どの状態がAなのかなどを明確にしないと評価する際に客観性を欠くことになるため、評価規準をきちんと作ることが必要となる。これは授業内での観察やスピーキングテストの場合も同様である。また、原版は、生徒の実態と指導者のねらいに合わないものがあるため、新規に作成した方が、生徒の実態により即したものにしやすい。


何よりもまずはシャトルチャットの原版を使ってみることが大切である。そして使用した上で、学校や生徒の実態に合わせてアレンジを加えていくことで、生徒の興味関心が高まり、それが「話す」だけでなく「聞く」さらには「読む」「書く」につながっていくことになると考える。今後もこれまでの成果と課題をしっかりと踏まえ、シャトルチャットを使った授業を実践していきたいと考えている。

シャトルチャット ワークシート例

① 元版の利用 (2年生)

Class _____ name _____

I got up~. What time did you~?(眠そうな人に) <何時に起きたの?寝たの?>

A: I (起きた) at 時刻 this morning.	起きた got up
(何時に) did you get up this morning?	何時に=What time
B: I (起きた) at 時刻 this morning.	
A: (何時に) did you go to bed last night?	
B: I (寝た) at 時刻 .	

②アレンジ (1年生)

shuttle chat 1	What is ~?	class() No.() name
Ms.		Mr.
What's that?		
		It's a UFO.
Really?		
		Yes, it is.

shuttle chat 2		
Ms.		Mr.
What's that?		
		It's ().
()?		
		Yes, it is.

いろいろ変えて言ってみよう!		
・dragon(ドラゴン)	・mermaid(人魚)	・E.T
・Godzilla	・Nessie(ネッシー)	
・No way!(ありえない!)	・No kidding(まさか!)	・You're kidding(冗談でしょ!)
・Unbelievable(信じられない!)	・Are you serious?(本気に?)	・Are you sure?(本気に?)

~つなぎの英語~		
Wow! (ワーオ!)	Great! (すごいや!)	Why? (なぜ?)
Really? (ホント?)	Well. (ええと)	Uh, huh. (へえ)
Go on. (続けて)	And? (それで?)	Me, too. (私も)
I see. (分かりました)	Pardon? (もう一度言って)	

- chat1 会話文を見直し、イントネーションに気をつけて読む。
- chat2 会話文の[]を自分で変えて読む。
- chat3 会話の[]を見直し、~つなぎの英語~の中の言葉を所々に加えながら読む。

③オリジナル（3年生）

★疑問詞+不定詞&want+人+to

1. 情報をつかえよ！ <C>で〜を5回分かったら！ >

<A>	<C><D>
①I want to eat sushi.	④Oh, you want to eat sushi.
②Please tell me <u>where</u> to eat it.	①I think Hokkaido is the best.
③I see. Hokkaido is the best, isn't it?	② Yes.
④But I don't know <u>how</u> to go to Hokkaido.	⑤Oh, really? I'll tell you later.
⑤ And please tell me <u>what</u> to eat.	③ I want you to eat "Sushi".
⑥ Oh, I will eat "Sushi". Thank you.	④ You are welcome.

2. 情報をつかえよ！ <C>で〜を4回分かったら！ > +同じ疑問詞(疑問詞)を記入せよ！

<A>	<C><D>
①I want to eat (*)	④Oh, you want to eat (*)
②Please tell me <u>where</u> to eat it.	①I think (*) is the best.
③I see. (*) is the best, isn't it?	② Yes.
④But I don't know <u>how</u> to go to (*)	⑤Oh, really? I'll tell you later.
⑤ And please tell me <u>what</u> to eat.	③ I want you to eat " * ".
⑥ Oh, I will eat " * ". Thank you.	④ You are welcome.

シャットアウトカード 16142

I want ... to ~ (考えや意思を伝える)

[4A. 08D. 15L / 1. 53]

[文化祭バージョン] 08D-CROSSING/02L-4

A: The school festival is coming.
B: I want _____ to visit our school.
What do you think?
A: I want _____ to visit our school.
B: Let's do Janken to decide.

[運動のランズバージョン] 08D-CROSSING/02L-4

A: Genie (ジーニー) is coming.
B: I want him to _____.
What do you think?
A: I want him to _____.
B: Let's do Janken to decide.

(生徒作品例) 指定したチャンクは I've never / it's important / in the world

☆I've been in the bed since I was a child, because I've been sick.

☆I've never run. I want to travel in the world. Do you feel happy?

☆It's important to be healthy.

3D ○○○○

☆I've never broken a lot of people's heart. It's important for me not to break someone's heart. I am loved by people in the world. I've lived in Tokyo since 1983. Who am I?

☆This card was written by Mickey Mouse. He said, I'm going to visit Tottori on August 4th. I'm looking forward to it!

3C ○○○○

- I've never been to foreign countries.
- I want to visit many countries in the world.
- So, it's important to know about foreign countries.

3C ○○ ○○

Cグループ分科会

「実用的運用能力の育成」

～4技能を統合した指導の工夫～

Cグループ：書くことを柱として

1. テーマ設定の理由

学習指導要領では英語の書くことの活動について、「聞いたり読んだりしたことについてメモをとったり、感想、賛否やその理由を書いたりする」「身近な場面における出来事や体験したことなどについて、自分の考えや気持ちなどを書く」「自分の考えや気持ちなどが読み手に正しく伝わるように、文と文とのつながりなどに注意して文を書く」ことを指導し、それらの力を習得するために、言語材料の理解や具体的な場面や状況に合った言語活動であることに配慮することとなっている。書くことは、日々の授業の中でごく当たり前に取り入れられている活動の1つであるが、「聞くこと」「読むこと」「話すこと」「書くこと」の4技能の中で生徒が最も苦手意識を持ち、なおかつ習熟に時間がかかるのが書く活動である。

Cグループで実施したアンケート結果によると、他の技能と比べて「書く活動」が好きな生徒は少なく、語彙や文法の理解に苦しみ、英語使用への意欲が持ててない生徒が多いことが分かる。一方で、書くことが好きな生徒は書けるようになりたい内容として「世の中のこと、社会情勢、日本の伝統文化、本の英訳、教科書に載っていない文章、名言・格言、何も見ずに書けるようになりたい」など、教科書以外の多くの情報や知識を必要とする発展的な力を身につけたいと望んでいる。

言語活動に対する意欲や理解の個人差はあっても、書くというアウトプットをして初めて自分の文法知識などを確認することができ、書く対象や目的を明確にし、適切なフィードバックを継続的に行うことによって、生徒の学習意欲を高め言語習得の促進につながると考えられる。

本グループでは「学習意欲を高めるための工夫」をテーマに、各校での実践例を交換し合い、生徒の意欲向上の手がかりを探ってきた。さらに立命館大学の山岡憲史教授の指導を得て、ライティングの実践力を身につけるために最終的な目標を「決められた時間内に即興でパラグラフを書く」と設定し、そのために必要だと考えられる要素を含んだ活動を共通実践として行った。

2. テーマにせまるための実践事項

- ◇ 意欲を高めるための工夫とアンケート結果の活用
- ◇ vocabulary notebook（辞書の活用、語彙のストック）
- ◇ フレーズ抜き出し活動
- ◇ 5 minutes writing（即興でパラグラフを書く）

3. 具体的な取り組み

【意欲を高めるための工夫】

- マイスター制度やパスポートなどステッカーを与え、評価に加える。
- 自分のこと、自分の興味のあることなど、トピックを工夫する。
- 書く相手を意識させる。
- スピーキングに発展させるなど、書く目的を明確にする。
(自己紹介・ファンレター・将来の夢・行きたい国発表・休暇の過ごし方・日記など)



【Vocabulary notebook】

<活動の目的> 辞書に親しみ、使える語彙を増やす

<実施方法>

1. 毎時5分間の帯活動
2. 今後の学習に関連するトピックを黒板に提示
例) school event, stationary, travel, yesterday...
3. 1分間でトピックから思い浮かぶ単語やフレーズをノートに書き出す
(英語・日本語どちらでもよい)
4. 残り4分間で書き出したものを班でシェアしたあと、和英辞書で調べて記入

Monday	yesterday-	June 16th	-something you bring to a trip-
club activities		bag	
school	carry		
studied	clock		
had school lunch	all		
fish	money		
home work	is		
watch TV	toothpaste		
dinner	used		
break-fast	clothes		
	\$		
	trunk		
	to go		
	food		

【フレーズ抜き出し活用】

<活動の目的>

教科書の本文の読解を通し、英作文の際に使える語彙や語句を増やす。

<活動の目的>

1. 本文中の重要な語句や、表現をまとめて抜き出す。
2. 各自がワークシートに取り組んだ後、黒板で答え合わせをして内容理解に必要なフレーズを確認する。
3. それらのフレーズを活用して、基本的な表現を含む1文の英作文の練習に取り組む。
4. 宿題として、3. の英文を含む、5文のパラグラフを書いてくる。
5. ALT, JTE のチェックを受けた後、いくつか紹介し、Share する。

フレーズチェック・シート			
	意味		English
1	…を見る(2語)	1	
2	…に似ている(2語)	2	
3	…ですよ(2語)	3	
4	一番大きな川(3語)	4	
5	世界で(3語)	5	
6	何年間も、何年にもわたって(3語)	6	
7	水力(2語)	7	
8	役に立つ		
9	…を通して流れる(2語)		
10	= very big, very large		
11	熱帯雨林(2語)		
12	…かも知れない		

フレーズチェックの
4番が使えます

3. フレーズチェックを参考にして、次の日本語の意味を英文で書こう。

① 大山は 鳥取県の最高峰です。
→

② 私たちのクラスの生徒の57パーセントが女子です。
→

4. look like を使って、オリジナルの英文を書こう。

<日本語>
English →

フレーズチェックの
2番が使えます

【5 minutes writing】

たて糸 (input) : 文法・単語・熟語の習得

- 単語練習、フレーズチェック、文型ドリル、パターンプラクティス

↓

- 授業での練習のみならず、家庭学習（自学ノート）でも基礎的基本的事項の定着を図る
- とにかく繰り返し言う、書く。

よこ糸 (output) : 内容のある文・つながりのある文へ作文

- ◇ 5 minutes writing 【話題の展開の仕方・つなぎ言葉の使用】

→5分間で5文を目指す。トピックを指定、あるいは用いる文法事項を指定し、つながりのある文を書くことを意識させる。

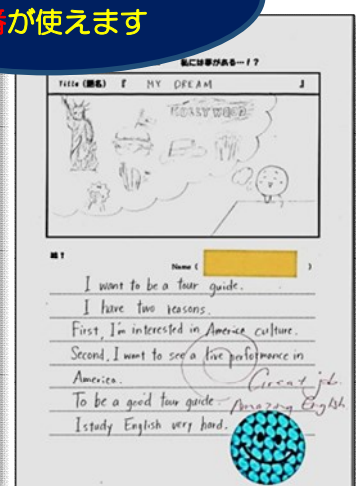
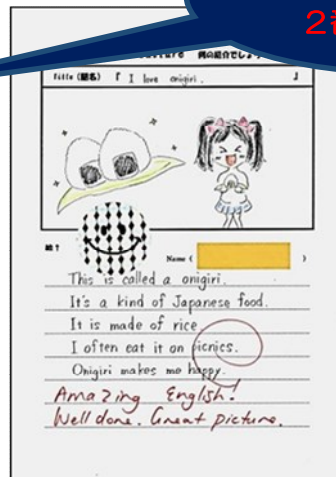
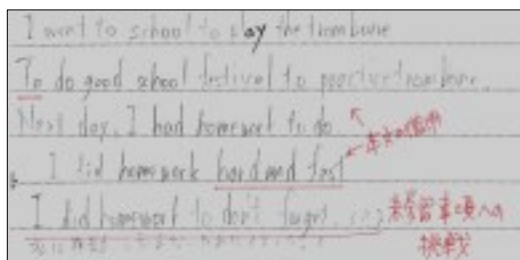
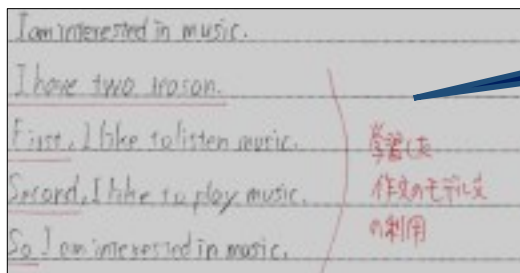
- ◇ 加筆作文【復習と新しい学習内容の定着】

→新しく学習した文法事項を使って、以前の自分の作文に文を付け加えていく。

- ◇ 作文課題【発展・応用的な作文活動】

→週に1回程度のペースで宿題として作文を書く。学習した文やモデル文を提示することで、英作文ができるような手立てを立てておく。

フレーズチェックの
2番が使えます



〈 練習作文 〉

5minutes Writing name _____
*be interested in (～に興味がある・好きなこと) を使って作文しよう。自分のこと・家族のこと・友達のことでもいいです。5文書けるとマイスター認定!!

I am interested in TV game. I play the game Saturday and Sunday.
I like DIABLO 3 very much.

〈 発表&掲示用作文 〉

5minutes Writing name _____
*be interested in (～に興味がある・好きなこと) を使って作文しよう。自分のこと・家族のこと・友達のことでもいいです。5文書けるとマイスター認定!!

I am interested in TV game.
I play game on Saturday and Sunday.
I like Gundam game.
I'm looking forward to "Gundam versus".
TV game is very exciting.

〈 同じ生徒の作文(数回練習後) 〉

4. まとめ (成果と今後の課題)

〈成果〉

- ・ 人前で自信をもって発表する生徒が多かった。
- ・ 1つ選んで書くだけでなく、日本文化紹介ゲームの中で、あるものについて即興で紹介できる力を競わせたので、生徒も意欲的に楽しんで力を伸ばすことができた。
- ・ 例文を読む機会が増え、作文にうまく活用できるようになった。
- ・ すぐに教員に頼らず、ひとまず自分で作文するようになった。
- ・ 調べた単語をその後の活動 (主に作文) に活用できた。
- ・ 書く活動を意識的に取り入れていくことで、書く機会が増え、書くことに対する生徒の抵抗が少なくなった。
- ・ 学習した内容を活用できるよう助言をしたり、教科書や辞書などの活用を促したりすることで、どう書けばいいのかのヒントを得て書くことができるようになってきた。
- ・ つなぎ言葉の指導を行うことで、まとまりのある文を書こうとする意識が高まり、より良い作文へと向上していった。
- ・ 2年と3年で共通の題材で作文を行なうことで、3年生にとっては復習になったり、3年生らしい作文を書こうという意欲が高まったりした。また、2年生では、3年生の作文の良いところを学び、表現の幅を広げることができた。新文法事項の導入にも3年生の作文を利用ことができると考える。
- ・ 職場体験学習の英作文は、まとまりのある英文だが、語順に意識しながら書くことができた生徒が多くいたので、語順指導がいかされているように感じた。

〈課題〉

- ・ 単語自体の意味を覚えられず困ってしまう生徒や、前置詞や接続詞などが登場したときに混乱してしまう生徒も見られる。
- ・ 日本語の語彙に比例して、1語2語で終えてしまう生徒がいる。
- ・ トピックとは別の興味のある単語を調べてしまう。
- ・ シェアせずにひたすら辞書に向かう生徒もいる。

- ・生徒のエラーをどのようにフィードバックしていくか。同じようなエラーやよくあるエラーをしないようにするための手立てを考える必要がある。
- ・添削指導の必要性もある。教師の添削のみならず、生徒同士の添削や、自分自身での添削などの指導方法を工夫していく必要がある。
- ・書く前によい例（先輩の作品）をたくさん示すともっと質が上がったのではないかと思う。

Dグループ分科会

『実践的運用能力の育成』

～4技能を統合した指導の工夫～

研究主題 **Dグループ「学習意欲を高める視覚教材の工夫」**

1. テーマ設定の理由

本グループでは、現行の学習指導要領において「4技能を統合的に活用できるコミュニケーション能力を育成する」ことを基本にしている。その4技能を使った言語活動を支えるためにも、基礎基本の定着が不可欠だと考える。また、誰にでも理解できるユニバーサルデザイン授業の視点から見ても、情報の視覚化は多くの学習者に理解を促すことが認められている。パワーポイントの特徴である「動く、消える、写真や動画の利用」などは英文法を理解する上できわめて効果的であると考え、テーマを設定した。

2. テーマにせまるための共通実践事項

平成23年度より、「学習意欲を高める指導法の工夫」という東部地区英語教育研究会[以下：東部英研]共通の主題が設定され、鳥取市・八頭郡共にそれぞれの小テーマを設定し研究を行ってきた。平成26年度からは、東部英研共通の主題を「実践的運用能力の育成～4技能を統合した指導法の工夫～」と設定し、Dグループではサブテーマを「学習意欲を高める視覚教材の工夫」とし、研究を行ってきた。

まずは視覚教材を使用するため、教材研究及び実践を行い、集約及び共有し実践を重ねた。部員の中にはほとんど視覚教材を授業に取り入れたことがないものもいたが、デジタル・アナログを問わず実践し、メリット・デメリットを検証した。

視覚的教材実践 【1学年】		Dグループ
	デジタル	アナログ
4	英語教科書	英語教科書
5	英語教科書	英語教科書
6	英語教科書	英語教科書
7	英語教科書	英語教科書
8	英語教科書	英語教科書
9	英語教科書	英語教科書
10	英語教科書	英語教科書
11	英語教科書	英語教科書
12	英語教科書	英語教科書
13	英語教科書	英語教科書
14	英語教科書	英語教科書
15	英語教科書	英語教科書
16	英語教科書	英語教科書
17	英語教科書	英語教科書
18	英語教科書	英語教科書
19	英語教科書	英語教科書
20	英語教科書	英語教科書
21	英語教科書	英語教科書
22	英語教科書	英語教科書
23	英語教科書	英語教科書
24	英語教科書	英語教科書
25	英語教科書	英語教科書
26	英語教科書	英語教科書
27	英語教科書	英語教科書
28	英語教科書	英語教科書
29	英語教科書	英語教科書
30	英語教科書	英語教科書
31	英語教科書	英語教科書
32	英語教科書	英語教科書
33	英語教科書	英語教科書
34	英語教科書	英語教科書
35	英語教科書	英語教科書
36	英語教科書	英語教科書
37	英語教科書	英語教科書
38	英語教科書	英語教科書
39	英語教科書	英語教科書
40	英語教科書	英語教科書
41	英語教科書	英語教科書
42	英語教科書	英語教科書
43	英語教科書	英語教科書
44	英語教科書	英語教科書
45	英語教科書	英語教科書
46	英語教科書	英語教科書
47	英語教科書	英語教科書
48	英語教科書	英語教科書
49	英語教科書	英語教科書
50	英語教科書	英語教科書
51	英語教科書	英語教科書
52	英語教科書	英語教科書
53	英語教科書	英語教科書
54	英語教科書	英語教科書

H26 エクセルデータ 《図1》

3. 具体的な取り組み

(1) 視覚教材の充実

授業の中で、視覚教材をデジタル・アナログ問わず活用し、教材を作り使用した。特に、デジタルでは PowerPoint を使って提示したり、写真や映像などを取り入れたりした。

(2) データの分類

実践例を持ち寄り、教材をデジタル・アナログの2種類に分け、その2種類をそれぞれ【導入】・【ドリル】・【応用】・【イベント】の4つの使用場面に区切り分類をし、エクセルファイルでまとめ、リンク設定をして簡単に活用できるように表を作成した。

また、そのファイルの中も使用場面→文法項目ごとに見えるように設定し、3学年別々のシートにした。(《図1》及びCD-ROMのH26エクセルファイルを参照)

文法項目ごとに細分しリンク設定をすることで、お互いが作成した実践を活用しやすくなった。また、リンク設定をすると視覚教材データが作成されている文法項目の色が変わるので、データのあまる使用場面・文法項目がどれかが瞬時に分かり、どの場面で視覚教材が有効か、示しやすいかが分かりやすくなったと思う。

(3) デジタル教材の充実

平成27年度には、デジタル・アナログの2つを実践していたが、デジタル教材に焦点を絞り、パワーポイントの示し方やタイミングの工夫、作成にあたっての技術向上等を部会の中で検討し、よりよい視聴覚教材の作成に努めた。

(4) エクセルファイルからの使用場面別検索

使用場面の頻度から、【導入】・【ドリル】・【応用・イベント】の3場面に分類することにした。さらにファイルのまとめ方を文法→使用場面というファイル設定に変更し、より使いやすさを追求した。(《図2》及びCD-ROMのH27エクセルファイルを参照)

視覚教材実践 Dグループ ～ デジタル教材 ～							
1 年 生	アルファベット・単語	2 年 生	be動詞【過去】	3 年 生	間接疑問文	サ ン プ ル 集	power point教材の作り方
	be動詞		have to		関係代名詞		書籍バリエーション
	一般動詞		must		現在完了		ゲーム
	SVC		SVOC		後置修飾		異文化教育
	中級・複習		SVOO		接尾動詞		その他
	命令文		There is /are		受け身		
	Don't・Let's・please		助動詞		不定詞		
	疑問詞		接続詞		It for to～		
	代名詞		助名詞		その他		
	現在進行形		比較				
	過去形		不定詞				導入
	助動詞		未来				ドリル
	二重疑問		その他				応用・イベント
	その他						

(5) 使用場面別のメリット・デメリット

使用場面の【導入】・【ドリル】・【応用・イベント】3グループに分かれて、どのような使用方法がそれぞれの場面には有効か、実践から話し合いを行いまとめた。

《英語科からアンケート》 質問には回答で教えて下さい。

(1) 英語の授業でパワーポイントや映像を使った授業は

◎ そう思う ◎ そう思わない ◎ どちらとも思えない

◎ どちらとも思えない

(2) (1) で「◎」と答えられた人になぜですか。ぜひ、そう思いますか。
(回答でも◎を記入してください。その場合は超過すること。)

ア) 色が使われているから
イ) アニメーションなどの動きが分かりやすいから
ウ) 一度にたくさんの情報が同時に提示されるから
エ) 短い時間にとくさんの練習ができるから
オ) 面白い情報が出てくることごとく期待できるから
カ) どのような場面が一度で理解しやすいから
キ) テンポの良い授業になり、集中しやすいから
ク) 繰り返し練習ができるから(クイズなど)
コ) その他

(3) (1) で「◎」と答えられた人になぜですか。ぜひ、そう思いますか。
(回答でも◎を記入してください。その場合は超過すること。)

ア) 黒板の代わりに黒板が汚れるの心配
イ) 黒板など固定の装置が壊れるの心配があるから
ウ) 文字や図形などが黒板のように残らないから(消すのが難しい)
エ) 黒板や印刷された物の方が集中できるから
オ) 黒板や印刷された物の方が集中しやすいから
カ) 黒板で書くのも電子黒板もあまり変わらないから
キ) その他

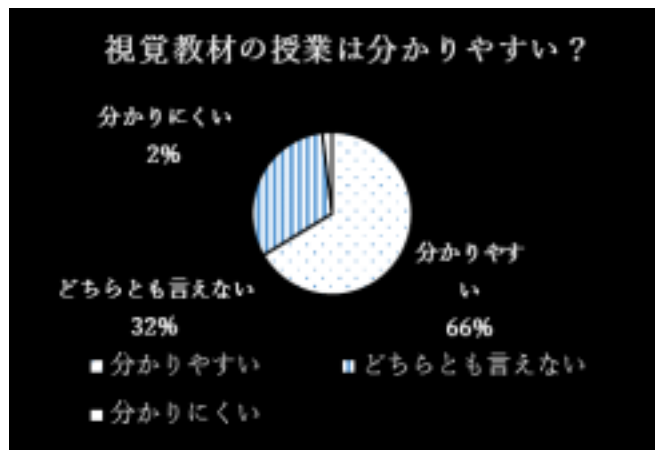
回答欄

回答欄

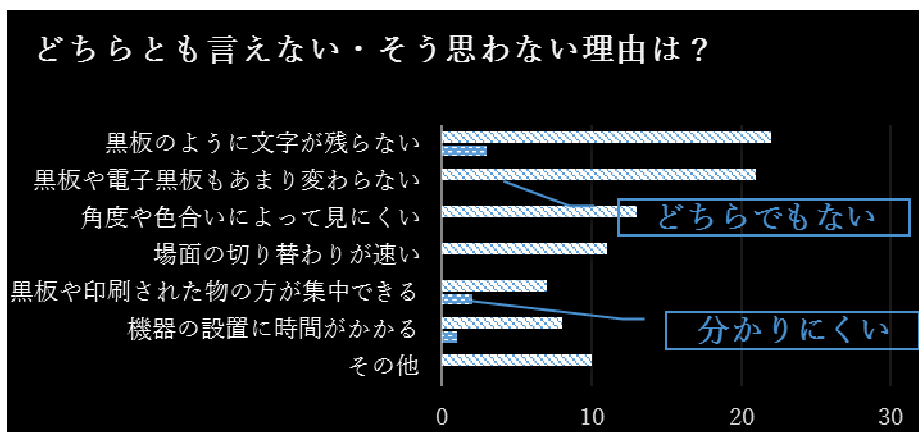
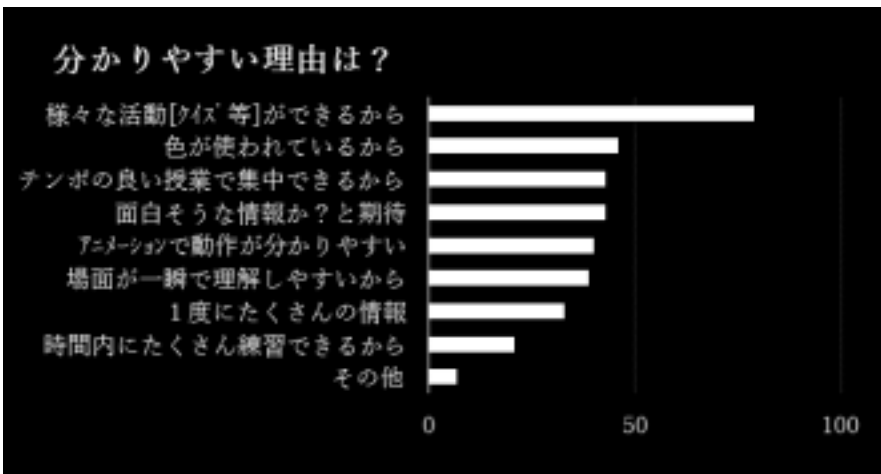
回答欄

(6) アンケートの実施

八頭中学校の3学年の生徒を対象として視覚教材についてのアンケートを実施した。(この学年は視覚教材の授業も板書中心の授業も両方受けている。)



アンケート内容《図3》



4. まとめ(デジタル教材に特化して)

【成果】

(1) 生徒・授業におけるメリット

- ①興味・関心を引くことができる。
- ②色分けができるので見やすい
- ③たくさんの情報量が一度に提示できる
- ④状況が視覚的に捉えやすい
- ⑤アナログでできない動きがデジタルではできる

[PowerPoint のアニメーションなど]

(2) 教師におけるメリット

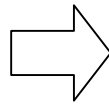
- ①何度でも同じ授業が再現しやすい
- ②授業を作るのに時間がかからない

[1回 PowerPoint などのデジタルデータを作るだけ]

- ③作ったデータを共有できる

【課題】

- ①黒板のように字が残らない
- ②角度や色合いによっては見えにくい
- ③機器の設置に時間がかかる
- ④機器の環境で影響される



【対応】

電子黒板や印刷物などを併用する
黒地に白字などは比較的に見やすい
生徒が待ち時間にできる課題を



視覚教材は生徒が学習する上でとても有効なものである。また、生徒の印象にも残りやすく、PowerPoint のアニメーションなどを使うことで、理解も深まりやすい。授業を作る立場からも教師が同じ授業を何度でも再現でき、様々なパターンの授業の構成も可能になる。ただ、視覚教材はメリットも多いが、デジタルだけでなくアナログの手立てを併用することで、ますます生徒の理解を深めることができる。